

「山吉文庫」の基礎的研究

A Basic Research on “Yamayoshi Bunko”

岩田みゆき

IWATA, Miyuki

〈研究成果の概要〉

「山吉文庫」は、越後国蒲原郡加茂町（現新潟県加茂市）の漢方医森田甫三と蘭医森田千庵父子に関する史料群である。1977年にその大部分が片桐一男氏（本学名誉教授）を介して、千庵の子孫である山吉卓爾氏より本学図書館に寄贈された。本プロジェクトは、この史資料群について、①各地に分散した関連史料の所在の確認・調査及び、本学所蔵「山吉文庫」の位置づけと再評価。②本学所蔵の「山吉文庫」の保存・整備。③森田甫三・千庵父子に関する研究論文・文献資料の調査。④「山吉文庫」の解説を行い、片桐氏以降長く実施されてこなかった本学所蔵「山吉文庫」についての基礎的研究を進めた。

キーワード 山吉文庫・森田千庵・森田甫三・片桐一男

1 研究背景と研究目的

「山吉文庫」は、越後国（現新潟県加茂市）の漢方医森田甫三【1767（明和4）～1828（文政11）年】・蘭学者森田千庵【1798（寛政12）～1857（安政4）年】父子に関する史資料群である。本学所蔵の「山吉文庫」は、1977（昭和52）年に御子孫で旧所蔵者である山吉卓爾氏により本学に寄贈された史資料群である。「山吉」は森田家の本姓であり、千庵没後その跡を継いだ専庵によって先祖の山吉に復したとある（『加茂市史 通史編上巻』令和5年665頁）。

「山吉文庫」の研究は、本学名誉教授片桐一男氏によってはじめて本格的な学術的調査・研究が進められ、散逸した史料の所在調査・史料目録の作成も行われ、その研究成果は、1961（昭和36）年「蘭医森田千庵伝研究」（『法政史学』14）、1977（昭和52）年「山吉文庫について」（『青山史学』5号）、1984（昭和59）年「『本草千種』と「山吉文庫」をめぐる蘭方医たち」（『飯沼慾斎』）などにまとめられている。昭和52年には精力的に研究を進められた片桐一男氏の仲介により、山吉卓爾氏から「山吉文庫」として本学図書館に寄贈さ

れることとなり、現在は本学史学科で預かり、保管・研究を行っている。本学寄贈の経過については片桐氏の「山吉文庫について」（『青山史学』5号）に詳しい。森田甫三・千庵父子については、地元では漢方医・蘭方医として著名であり、片桐氏以降では、1970年代から90年代にかけての長谷川一夫氏の研究が充実している。自治体史では、新潟県史のほか、近年では新潟県加茂市で市史編纂事業の一環として調査が進められ、特に千庵についてはその中で大きく取り上げられている。しかし、片桐氏の研究以降、医学史・洋学史研究で注目されてきたものの、森田父子のような優れた漢方・蘭方の民間医師を育んだ地域的特質や時代背景に関する研究は少なく、彼ら自身の学問研究の内容や行動、交流関係についても、さらに研究を深める余地が多く残されている。

また本プロジェクト申請の背景としてもう一つ付け加えるべき点として、各地に分散所蔵されている「山吉文庫」について、多くの所蔵館が既に史料や目録を刊行物やインターネットなどで公開しているにもかかわらず、本学寄贈分については、片桐氏の論文以降ほとんど研究が進んでいない点である。今後さらに調査を重ね、その史料価値を十分に明らかにするとともに、史料の再整理・保存・管理を行い、広く利用・公開を進める作業が急務となっている。

以上の背景を元に、本研究では、研究史や全国に散逸した森田家の資料群を再調査し、本学所蔵分を正しく位置づけるとともに、越後国の民間医師である森田父子の学問や交流関係をはじめとして、すぐれた医師が育成された地域的特色や時代背景などについても目を向け、新たな切り口で、再評価することを目的とする。

2 研究内容・研究計画・研究経過

本研究は3年計画の予定でスタートした。初年度は、「山吉文庫」の基礎的な研究として、史料の整備、研究史整理を軸に進め、本学所蔵史料の位置づけを行う。併せて史料解説も進めていく。二年目は、さらに史料解説と調査をすすめ、越後国の漢方医・蘭方医である森田父子の学問や交流関係など、その実像を明らかにしていく。最終年は目録・史料集の作成など、研究成果を広く公表してゆく予定である。

2024年度はその初年度にあたり、「山吉文庫」の基礎的な調査・研究を行うことを目標とした。具体的には、①各地に分散した関連史料の所在の確認・調査を改めて行い、本学所蔵の「山吉文庫」の位置づけと評価を行う。②本学所蔵の「山吉文庫」の整備を進める。史料の再整理を行うとともに、すべて写真撮影を行い原史料の保護につとめる。③森田甫三・千庵父子に関する研究論文・文献資料の調査を行う。④「山吉文庫」の解説を進める。中でも、現在進めている森田甫三の「道中日記」を解説し、漢方医として著名な森田甫三の新たな一面を明らかにしていく。以上の4点である。

以上の研究計画にもとづき、本年度は、以下のように実施した。①については、新潟県加茂市立図書館所蔵の山吉文庫の調査を行った。同図書館所蔵資料については、『加茂市史資料編 6 文化財』（令和 2 年）にすべて写真版で紹介されている。また、インターネット上に公開されている新潟大学附属図書館所蔵森田文庫の目録と所蔵史料の確認を行った。調査の内容については、次節 3 (1) において詳述した。各地に分散保存されている資史料群については、次年度以降も継続して行っていく。②については、史料の再整理・目録再作成・入力作業・写真撮影を行い、ほぼ完了した。③については、主要な研究論文・史料集について収集を行い、研究史の整理を行った。詳しくは、次節 3 の研究成果において、堀内誠司氏が(2)「森田千庵・甫三に関する研究史」として報告しているので、参照されたい。④については、森田甫三の「道中日記」や書状を解読中である。引き続き次年度も継続して解読していく。また、この間の研究成果として『人文科学研究所論叢』7 号（本号）において、堀内誠司氏が研究ノート「越後の漢方医・森田甫三宛書状について一洪川道達書状を中心に一」を発表しているので、併せて参照されたい。

3 研究成果報告

本年度は、本学所蔵の「山吉文庫」の基礎的研究として、上記の①から④の四つの課題をにかけて取り組んできた。その取り組みの中から、(1) 本学所蔵「山吉文庫」の概要と特徴、(2) 森田千庵・甫三に関する研究史の 2 点について、担当者ごとに報告する。なお 2025 年度は「山吉文庫」の研究―森田甫三・千庵父子の日記と書状の研究」として、引き続きプロジェクト申請をしており、継続して史料調査・研究にあたっていく。

(1) 本学所蔵「山吉文庫」の概要と特徴 文学部史学科教授 岩田みゆき（研究代表者）

本学所蔵の「山吉文庫」は、古文書類 251 点余（内冊子 51 点、書状類 200 点）、文書以外では、高島秋帆行書（掛け軸）1 点、木製大看板・版木（一粒丸）各 1 枚、短冊 6 枚、印 7 点がある。これらの資料群は、1977 年に本学に寄贈された際に片桐一男氏によって整理され、目録化されており、目録は既に『青山史学』5 号に公表されている。ここに掲載された目録もかなり詳細なものであるが、今回のプロジェクトにおいては、それに加えて内容や法量・丁数などを追加し、備考欄を設けることでさらに充実させ、エクセルデータ化することで検索が容易にできるように改良した。また原文書保護のため、すべてデジタルカメラで撮影をし、閲覧利用をしやすくした。この作業は、史学科学生・大学院生によって行った。

ところで、本学寄贈分に関連する資料目録としては、1977 年寄贈時の目録のほか、1961 年本学に寄贈される以前の状況を伝える片桐氏によって作成された「森田千庵関係史料目録」（「蘭医森田千庵伝研究」『法政史学』14 号所収）、1962 年「森田千庵蘭学関係資料

所蔵者別目録」(「蘭医森田千庵とその資料および蔵書」『越佐研究』第18集所収)、1995年片桐氏の研究成果を継承し、長谷川一夫氏によって進められた全国調査によって明らかになった「森田千庵関係史料目録」(「越後の蘭方医森田千庵関係資料について」『洋学史研究』12号所収)などが残されている。長谷川一夫氏作成の「森田千庵関係資料目録」には、加茂市立図書館山吉文庫、新潟大学附属図書館旭分館所蔵森田文庫、養徳文庫、個人所蔵分(市川浩一郎氏・小森長栄氏・日野田潤一氏・森田芳夫氏)、青山学院大学図書館山吉文庫、早稲田大学図書館洋学文庫、財団法人静嘉堂文庫、東北大学附属図書館狩野文庫、西尾市立図書館岩瀬文庫、京都市立西京商業高等学校図書館平野文庫、財団法人武田科学振興財団杏雨書屋、九州大学附属図書館医学部分館、シーボルト記念館所蔵分などの目録も掲載されており、この段階での資料所蔵状況を大方把握することができる。

1961年作成の片桐氏による目録によると、当時の資料所蔵状況は、①新潟大学医学部図書館所蔵資料(未整理につき蒲原宏氏保管中)33点、②小柳鉄次氏所蔵資料(千庵傍系に当る、新潟県加茂市)44点、③山吉卓爾氏所蔵資料(千庵傍系に当る)9点、④国立国会図書館支部静嘉堂文庫(旧大槻文庫本)3点、とある。この目録と、これから16年後の1977年に本学寄贈時に作成された目録、さらに18年後1995年長谷川氏による目録とを比較し、今年度実施した加茂市図書館の史料調査の結果を合わせて、この間の動向を検討してみたところ、以下の点が確認できた。すなわち、

- 1、未整理とされていた新潟大学医学部図書館保管文書の整理と研究が進む中で、人名録、文政事変雑録、戸塚亮斎(静海)から千庵宛書状四通、短冊・書・系図・ヒボクラテス肖像画など、その一部が現在の加茂市立図書館に移管された。また、現在新潟大学付属図書館には書状類がみられず、1961年段階で新潟大学が保管していた藤林普山・岡甫庵関係書簡類などの書状の一部の移管先は明らかではないが、長谷川氏の作成した目録によると、新潟大学・加茂市立図書館ともに山吉卓爾氏からの寄贈とあることから考えると、山吉卓爾氏の意向により、青山学院大学に寄贈された「山吉文庫」の中に含まれた可能性が高いと思われる。実際新潟大学で史料の保管をされていた蒲原宏氏が1956年に「尺牘からみた藤林普山と森田甫三、千庵父子」(『医譚』11巻28号所収)で紹介されている書状は、現在は本学所蔵の「山吉文庫」に含まれていることが確認できた。それ以外の産書・医学書の稿本・写本などの冊子類・円印がそのまま新潟大学医学部図書館に所蔵され、現在は新潟大学附属図書館旭分館森田文庫として公開されている。
- 2、新潟県加茂市小柳鉄次氏所蔵44点は、和漢洋の医学書の千庵自筆稿本や写本が大半を占め、そのほか専庵(千庵の養子)直筆の「蔵書目録記」、木製大看板、印、高島秋帆之行書、書状類が含まれていた。これらは山吉卓爾氏の管理するところとなり、そのすべてが「山吉文庫」として青山学院大学に寄贈された。
- 3、山吉卓爾氏所蔵分9点(山吉家系図・漫遊集覧・見聞雑記・方則二十一剂・漫録・丸

散方并製剤録・救急医法・千庵隨筆などの冊子類)がすべて青山学院大学に寄贈された、ということがわかった。

また、加茂市史編纂にあたられた関正平氏によると、「森田千庵に関する資料は、もともと直系のご子孫の山吉省吾氏(森田千庵の孫、親の専庵の代に山吉氏に改姓)の所蔵であったが、その後次男山吉頼奇氏が引き取り、さらにその子息卓爾氏や長女に引き継がれ保存された。」(『かも市史たより』No.11)とあり、その後の研究経過などを経て卓爾氏とそこち長女のお二人から各研究機関に寄贈されたものであることが記されている。

以上から、本学所蔵の「山吉文庫」は、旧山吉卓爾氏所蔵の9点と旧小柳鉄次氏所蔵文書44点を含んでおり、かつ旧新潟大学付属図書館保管分の内から移管された書状数点も含んでいる可能性を指摘した。また、その後の整理と研究を経て、新出の山吉家文書も含めて、学術的に高い研究成果を収めた片桐一男教授が勤務する青山学院大学に、一括して山吉卓爾氏から「山吉文庫」として寄贈されたものであることがわかる。

次に本学所蔵の「山吉文庫」について、概要と特徴をみておきたい。既述のとおり、本学所蔵「山吉文庫」は、古文書類251点余(内冊子51点、書状類200点)、文書以外では、高島秋帆行書(掛け軸)1点、木製大看板・版木(一粒丸)各1枚、短冊6枚、印7点であるが、数でみると、他の所蔵機関を圧倒しており、森田千庵・甫三父子や、加茂の医療研究の中軸をなす史資料群であるといえる。

まず冊子類をみると、51点の内38点が医療・薬剤などに関係するものであり、蘭方のみでなく洋・漢・和のすべてのジャンルに及ぶ書写・稿本・見聞記録・覚書などがみられ、医師としての幅広い教養や研鑽を知ることができる。作成年代・書写年代が不明なものが多いが、文政期のものが多く、古いものでは宝暦七年丸山玄忠による「活命集 全」、幕末期では安政四年千庵による「奇薬妙方漫録」などがみられる。これらの多くは、早くから注目され調査研究されていたもので、1961年段階の旧小柳鉄次家文書目録・旧山吉卓爾家文書目録にも含まれている。これらは森田家の医療の実態や、医学について知る上で不可欠なものである。残りの冊子類は、甫三や千庵の旅日記、隨筆、雜記覚帳類、人名録、詠草などの歌集、蔵書目録記、山吉家系図など、家や個人に関するものである。森田甫三・千庵を中心とする交流関係、行動、学問内容、興味や関心のあり方などを知る上で貴重である。既に、片桐氏・長谷川氏らによって主要な蘭書や蔵書目録記などが紹介され、新潟県史や加茂市史においても翻刻・紹介されているものもあるが、未検討のものも多く見受けられる。

書状類は200点と圧倒的に多く、これが本学「山吉文庫」の大きな特徴となっている。

書状類も冊子類と同じく大半が年不詳であるが、文政期のものが多く、天保期のものもみられる。書状の中には森田甫三や千庵が差し出したものや、山吉屋関係なども含まれるが、千庵に宛てた書状64点(内1点は甫三と連名)、甫三に宛てた書状53点(内1点は千庵と連名)と両父子に宛てたものが圧倒的に多く、そのほか森田様・森田旦那様・森田老大人・

森田大先生同若先生などと宛名に記されたものも13点みられる。その他千庵弟の圓治や正治に宛てた書状が1点ずつみられる。これらのうち、甫三、千庵の父子の間でやりとりされた書状や、川本幸民、小村英庵、嶋津琢斎、藤井芳亭、藤林普山などから千庵に宛てた書状、及び藤林普山から甫山・千庵父子に宛てた書状などは、既に片桐氏によって詳細に研究されているが（(2)の文献一覧を参照）、未検討の書状も多い。今後さらに検討を進めていきたい。

(2) 森田千庵・甫三に関する研究史 文学研究科博士後期課程 堀内誠司（チーム構成員）

本プロジェクトでは、今年度は②本学所蔵史料の整理・目録作成・写真撮影、③研究論文・文献調査、④史料の解説と研究、を主に担当した。④の成果として、本号（『文学部附置人文科学研究所論叢』第7号）に研究ノート「越後の漢方医・森田甫三宛書状について～渋川道達書状を中心に～」を発表したので、併せて参照されたい。以下では、③の研究成果に従い、蘭方医として知られる森田千庵およびその父・甫三⁽¹⁾についての先行研究を概観する。蘭学および蘭学者、とりわけ蘭方医については、現在に至るまで膨大な研究が蓄積されてきたが、杉田玄白や桂川甫周などに比べれば、越後国の蘭方医である森田千庵と、父の甫三については相対的にみて研究が少ないのが現状である。ある程度著名な千庵はまだしも、甫三については更に少ない。それでも、後述する片桐一男氏・長谷川一夫氏の両名を筆頭に、自治体史などの地域史研究、医学史研究において一定の成果が蓄積されてきた。以下、概ね年代順に成果を整理してゆく。なお、管見の限りで目に付いた文献一覧を、辞典類を含めて末尾に付した。

まずは各種辞典類⁽²⁾から概要をまとめよう。森田千庵（1798～1857）は越後国蒲原郡加茂町に、漢方医森田甫三の三男として生まれた。本姓山吉、名は徳盛、字は守古。千庵のほか逸庵、仙庵の通称を持つ。逸庵と称したのは晩年に至ってのことだったようだ。江戸の宇田川玄真・榕庵父子、のちに京の藤林普山の門人となっている。文政9年（1826）には幕府奥医師だった戸塚静海の勧めで長崎に遊学、シーボルトのもとで医学・蘭学を修め、二年後の文政11年（1828）に父の訃報に接して帰郷し、跡を継いだ。文化面では詩歌に通じており、寺門静軒に漢詩を、加納諸平・長沢伴雄に和歌を学んでいる。静軒に師事したのは、天保13年（1842）に『江戸繫昌記』による奉公禁止処分を受けた静軒⁽³⁾が越後を放浪していた時期であろうか。その他、伊藤圭介や伊藤玄朴、本間玄調といった医学者たちとも積極的に交流し、親交をもった。

研究史上おそらく初めて言及されたのは、呉秀三編『シーボルト先生3』に収録された大橋永三郎氏の原稿であり〔大橋1924〕⁽⁴⁾、呉秀三氏は大橋氏の原稿をもとに『シーボルト先生其生涯及び功績』〔呉秀三1926〕において、千庵について記載しているが、大橋氏の原稿をもとにしたもので、史料に基づく記述ではないとの批判があった⁽⁵⁾。次いで澤式氏

が稿本・写本を若干部紹介し〔澤 1935〕、蒲原宏氏が藤林普山と森田父子の間で交わされた書簡を多数翻刻した〔蒲原 1956〕ほか、千庵と戸塚静海の往復書簡を紹介し〔蒲原 1960〕、研究環境の整備が進んだ。

こうした状況のもと、蘭学・医学史研究として画期となる一連の業績を残したのが、片桐一男氏と長谷川一夫氏⁽⁶⁾である。

片桐氏は、広範な史料収集により基礎的な事績の解明を大幅に進めた。まずは父・甫三について伝記的事項や、甫三が藤林普山⁽⁷⁾と親交を結んでいたこと、西洋医学をも受容してその治療手腕が評判であったことなどを明らかにし、千庵の普山入門が、普山の旧友であった父の人脈を通じてのものであったことを明らかにした点で重要である〔片桐 1961〕。この片桐論文では、関係書簡も多数翻刻され、従来から知られていた「バタビア局方」（オランダ領東インドの薬物品質基準の公定書。ライデン薬局方よりも進んだ内容となっている）が、同書を文政5年（1822）に入手した千庵が翻訳したことや、当時幕府により禁じられていた舶来の蘭書を書写したことなどが判明した。特に舶来蘭書の書写は、杉田玄白らの病論会や新元会などと同じように、渋谷淡斎（甫仙）・藤井芳亭（加賀藩医）といった医師らと結成した蘭文読訳の会で行われたようで、片桐氏はこの場で学問的な蘭書以外にも蘭学社中のニュースも共有されたことを示唆している〔片桐 1961〕。この論文では千庵がシーボルトに師事したことの傍証や、藤林普山が越後を訪れたことの証となる書簡なども紹介され、事実解明のレベルが格段に上昇した。書簡によって越後長岡藩医の小村英庵との交流が跡付けられ、越後帰郷後の千庵のネットワークが当地の藩医にまで及んでいたことが明らかになった点も、千庵の位置づけを考えるうえで外せない事績である。

長谷川氏は、千庵の弟にあたる円治⁽⁸⁾にも着目し、「森田兄弟」としての蘭方修得のほか、片桐氏が課題として提示していた実際の診療、地域社会とのかかわりについて論じた。普山の越後來訪が、文政3年（1820）5月6日から9月4日までの短期間であったことを明らかにした〔長谷川 1974a〕ほか、千庵と円治とが往復書簡を通じて、医学を中心とした学問の研鑽に励んでいた様子を具体的に提示し〔長谷川 1974b〕、具体的な医療活動についても、従来不明であった円治の医術を治療願や患者への書き送りを通じて明らかにしている〔長谷川 1974b、1975〕。円治は医術にとどまらず、酒造業にも着手していたようだ。円治は酒造業の展開に際して転居しているが、長谷川氏はこの背景に酒造だけでなく長岡藩から出された蘭学禁止の触が影響していることを示唆している〔長谷川 1975〕。正治というもう一人の弟もいたようで、彼は柏崎町で開業し、他村の医師に蘭方医学を教えたり、千庵の友人とも交流して治療法や写真術について情報収集を精力的に行っていたという〔加藤ほか編 1988〕。長谷川氏の主眼は千庵に置かれていたようであるが、むしろ円治の事績が多く解明されたことで、森田家の家業としての医術が地域社会の中で展開し、受容される様相が明瞭に描き出されている。

以上の二氏による業績を基底として、新潟県史および近年の加茂市史編纂事業において森田千庵（および甫三）に注目が集まり、史料の翻刻・掲載、事績や影響についての論考が相次いで発表された。まず『加茂市史上巻』では、天保14年（1843）に加茂の青海神社で行われた献詠歌会に参加した越後の歌人46名のうちに千庵がいることが明らかになり〔加茂市編1975〕、歌人としての活動の一端が示された。『新潟県史資料編11』では千庵が著した『国医考』が翻刻・紹介され、晩年に国学・神道に心酔したという見解が示された〔新潟県編1983〕。『国医考』の成立年代は確定されていないが、本書では弘化年間以降の作と推定された。また加茂市発行の資料編〔加茂市編2008、2020〕では関正平氏により千庵・甫三関係の史料が多く翻刻された。甫三の父・仙庵（千庵の祖父）あての書簡や、藤林普山から甫三への書簡、千庵から戸塚静海あての書簡のほか、年次を欠く人名録や広告類などが翻刻されており、千庵・甫三の様々な人物との交流を知る重要な手掛かりを提供している。関氏はこうした一連の史料を基に森田父子の医療活動について論究しており〔石黒ほか編2005、加茂市史編纂委員会編2023など〕、甫三が没した際の香典帖の記述から、山本玄同（北方村）をはじめとした、越後国内各地の医師らと交流があったことを具体的に跡付けた〔加茂市史編纂委員会編2023など〕ほか、千庵が父から受け継いだ「一粒丸」⁽⁹⁾という薬の販売を行ったことなどを明らかにしている。

以上の諸論考をまとめると、森田甫三・千庵父子は、江戸・京都などの大都市や加茂郡を中心とした越後国内など、広範な地域で幅広い人脈を形成した蘭方医であり、その契機には江戸（甫三・千庵）や長崎（千庵）への遊学があった。現時点で、書簡やその他の周辺史料を通じた事績の解明はかなり進んでいるといえるが、蘭学・医学や和歌以外の甫三・千庵の学問的関心という点では、まだ追究の余地が多く残されているといえる。藩政を含めた政治史への位置づけも一部では行われているものの、多くは洋学史・医学史上での分析が主であり、更なる検討を要しよう。広範な交流から浮上する、従来気づかれてこなかった三都・地方双方での諸動向へのかかわりも、重要な論点となるであろう。

註

- (1) 「甫山」という表記もあるが、本稿では「甫三」に統一する。この点から読みが「ほさん」であることがわかる。甫三は江戸の幕府医官・岡甫庵の門人であった〔平松1999〕。
- (2) 奥沢康正・岡田真也編著『眼科醫家人名辞書』（思文閣出版、2006年）・日蘭学会編『洋学史事典』（雄松堂出版、1984年）・平松勘治『長崎遊学者事典』（溪水社、1999年）の記述に基づく。
- (3) 前田愛『幕末・維新期の文学』法政大学出版局、1972年、124頁。
- (4) この記述については関正平氏の指摘があり、「同（引用者註：大正）十三年五月二十一日付け呉秀三博士宛ての原稿が、呉氏の『シーボルト先生3』に「森田千庵」として収録されたものとしている（関正平「蘭方医森田千庵資料全国に」『かも市史だより』一一、加茂市教育委員会内市史編さん室、2005年3月、6頁）。

- (5) 片桐一男「蘭医森田千庵伝研究」〔『法政史学』第14号〕87頁に、「呉秀三博士は大著「シーボルト先生其生涯及び功績」大正十五年十月の中でシーボルト第一回渡来中の門人として簡単な伝を載せていられるが、千庵の京都・江戸遊学中の項その他につき誤謬がみられ、資料の紹介もきわめて少ない。それは大橋永三郎氏の誤報によって纏められたもので、実際に資料を手になされての既述ではなかったがためである。」としている。
- (6) 両氏は関係資料の目録や翻刻も多く発表している〔片桐1961・1962・1978、長谷川1991・1995など〕。他の目録としては新潟大学附属図書館旭町分館編『森田文庫資料』〔1998〕などがある。
- (7) 蘭学者。1836～1871年。医書の翻訳で知られる。山本四郎「藤林普山伝研究」〔有坂編1974所収〕にも詳しい記述がある。山本氏は普山と甫三・千庵の交流にも言及している。
- (8) 文化7年（1810）生まれ、天保14年（1843）に古志郡栃尾町に開業した。それ以前は父を手伝いながら医学修行に励んだと推測されている〔長谷川1974a〕。
- (9) 下痢や咳、産前産後の諸病に効能があるとの触れ込みであった〔加茂市史編集委員会編2023〕。

【文献一覧（五十音順）】

- 有坂隆道編『日本洋学史の研究三』創元社、1974年
- 石黒克裕ほか編『新・にいがた歴史紀行5』新潟日報事業社、2005年
- 奥沢康正・岡田真也編著『眼科醫家人名辞書』思文閣出版、2006年、199頁
- 加茂市史編集委員会編『加茂市史上巻』加茂市、1975年
- 加茂市史編集委員会編『加茂市史資料編二近世』加茂市、2008年
- 加茂市史編集委員会編『加茂市史資料編六文化財』加茂市、2020年
- 加茂市史編集委員会編『加茂市史通史編上巻』加茂市、2023年
- 片桐一男「蘭医森田千庵伝研究」『法政史学』14号、1961年10月、53～90頁
- 片桐一男「蘭医森田千庵とその資料および蔵書」『越佐研究』18集、1962年3月、56～62頁
- 片桐一男「『跋太亞勝亞局方』と森田千庵」『蘭学資料研究会研究報告』111号、1962年6月、189頁～193頁
- 片桐一男「山吉文庫について」『青山史学』5号、1978年3月、123～130頁
- 片桐一男「薩藩移籍と川本幸民の写真撮影成功」『洋学史研究』11号、1994年4月、105～117頁
- 加藤秀俊ほか編『人づくり風土記 全国の伝承・江戸時代一五』農山漁村文化協会、1988年
- 蒲原宏「尺牘からみた藤林普山と森田甫三、千庵父子」『医譚』11巻28号、1956年8月、15～24頁
- 蒲原宏「尺牘からみた森田千庵と戸塚静海」『医譚』復刊21号（通号38号）1960年4月、22～24頁
- 呉秀三『シーボルト先生其生涯及功業』吐鳳社、1926年〔初出1896〕
- 澤式「北越蘭醫の祖森田千庵」『医文学』11巻2号、1935年2月、96～98頁
- 新潟県編『新潟県史資料編一一近世六』1983年
- 新潟大学附属図書館旭町分館編『森田文庫資料』1998年
- 日蘭学会編『洋学史事典』雄松堂出版、1984年
- 長谷川一夫「越後の蘭方医森田兄弟について（一）」
『日本医史学雑誌』20巻3号、1974年7月、44～50頁〔長谷川1974a〕
- 長谷川一夫「越後の蘭方医森田兄弟について（二）」
『日本医史学雑誌』20巻4号、1974年10月、76～82頁〔長谷川1974b〕
- 長谷川一夫「越後の蘭方医森田兄弟について（三）」
『日本医史学雑誌』21巻1号、1975年1月、71～77頁〔長谷川1975〕

長谷川一夫「越後の蘭方医森田兄弟について（四）」

『日本医史学雑誌』20巻3号、1975年4月、67～71頁

長谷川一夫「藤林普山訳『解屍篇』について—森田千庵署名（印）入り写本より—」

『日本医史学雑誌』37巻2号、1991年4月、55～57頁

長谷川一夫「越後の蘭方医森田千庵関係資料について」

『洋学史研究』12号、1995年4月、59～94頁

平松勘治『長崎遊学者事典』溪水社、1999年、90頁